自傷サイトにおける「自傷創画像の公開」現象の検討

自傷者の語りから

○砂谷 有里

(¹ 明治学院大学大学院 社会学研究科社会学専攻博士後期課程)

キーワード: 自傷 自傷サイト 自傷創画像の公開

What is the Meaning of the Self-harm Scar Image Exposure in the Self-harm Website?

Based on Narrative analyses of the self-harmers.

Yuri Sunaya¹

(¹ Graduate School of Sociology, Meiji Gakuin University)

Key words: Self-harm, Self-harm website, self-harm scar image exposure

目 的

「リストカット」をはじめとする「自傷」は、死ぬ意志の有無や身体損傷の程度、反復性といった点から「自殺（未遂）」とは区別され、「心の痛み」への対処として、それを解消したり緩和したりするために行われるとされる（松本，2008）。今日においては、中学生・高校生の 7.5～12.1%（Matsumoto & Imamura 2008），大学生の 6.9%（山口ら，2004）に自傷行為の経験があることが報告されており，今日の青少年の主要な問題の 1 つとなっている。情報通信技術の発展した今日においては，インターネット上において，自傷当事者が自らの自傷について日記やウェブログを書いたり設置された掲示板で交流したりしているサイト（以下，「自傷サイト」と呼ぶこととする）が数多く存在している。「自傷サイト」の効果について肯定的・否定的両面から検討してきた筆者自身の一連の研究（たとえば砂谷，2008 2009）を通して見出した印象的な現象の 1 つが，自傷サイトにおいて自傷者が自傷創の画像を公開することがしばしばみられることである。本稿では，そのような自傷サイトにおける自傷創画像の公開の意味について，当事者の語りから検討することを試みる。

方 法

自傷サイトに関与する自傷者のなかから，①20 歳以上の成人（ただし，保護者の同意が得られている場合には，19 歳も対象とした）②調査時点で自殺念慮や頻繁な自傷がなく精神状態が比較的安定しているという条件を満たし，本人から同意の得られた者に対して，自傷サイトとの関わりを主たる調査項目とする半構造化面接調査を実施した。調査時期は第 1 回調査については 2008 年 6 月から 11 月，第 2 回調査については 2009 年 6 月から継続中であった。現在 10 名の自傷者に対する調査を完了しているが，本稿では，語りの中から自傷創画像の公開について言及されたものを取り出し，分析を行った。

結 果

（1）自傷創画像を公開した自傷者の語り

自傷創を公開した経験のある自傷者は 2 名であり，それについて以下のように語られている。

（自傷創の画像を公開する理由は）つらいんだよって，わかってほしい。

「つらいと書くとか自傷した事実を書くとかではなく，画像として載せるのは，どうしてですか？」

傷は目に見えるから。「つらい」と 10 回 100 回言っても分からない人は分からない。事実私はつらいといっぱい周りに言っただけで分かってくれなかったし，今も分かってくれない。

（A さん 20 代女性）

私にとって自傷の傷は開いた証，愛しいもの。記録しておきたい。残しておきたい。

「残しておくだけならば，自分で保存しておくだけでもいいと

と思いますが，公開するのはどうしてですか？」

自分以外の他の方の中でも残りたいという気持ちがあったと思います。自分のくらしみをそういう形であらわしているっていう感じ。それを誰かに見てもらいたい。（B さん 19 歳女性）

（2）自傷創画像を公開しようとした自傷者の語り

自傷創画像を公開したことはないが，公開しようとした，あるいは公開したいと思ったことがある者は 2 名いた。

私は（自傷創の画像の公開を）したことがないけれど，したい人の気持ちもわかると思います。……（中略）……ものすごく切ってしまったときとか，ちょっと写真に収めたい気持ちになるというか。記念じゃないですけど，心の傷ついているのは見えないので，それを視覚化するっていう意味で。『私はこんなに傷ついている』っていうことを誰の目に見てもわかるように。（C さん 20 代女性）

（自傷創の画像の公開を）している人を見て，いいなあって思った。なんか，なんかうらやましかったっていうか。……（中略）……『私はこういうつらさとかを抱えてるんだよ』みたいなことをわかってもらいたい，知ってもらいたいっていう気持ちがあったのかもかもしれない。（D さん 20 代女性）

考 察

自傷創画像を公開した／しようとした自傷者の語りの分析からは，自傷者にとって自傷創画像の公開は，自身が抱える目に見えない苦しみを目に見える形とする試みであることが考えられた。そうすることによって誰かに理解してもらいたい，あるいは，そうしなければ誰からも解ってもらえないという思いを抱いていることが示唆された。

引用文献

1. Matsumoto, T., Imamura, F., 2008, Self-injury in Japanese junior and senior high-school students: Prevalence and association with substance use. *Psychiatry and clinical neurosciences*, 62: 123-125.
2. 松本俊彦, 2008, 「自傷のアセスメント」『臨床心理学』 8: 482-488.
3. 松本俊彦, 2009, 『自傷行為の理解と援助—「故意に自分の健康を害する」若者たち』日本評論社.
4. 砂谷有里, 2008, 「リストカットをテーマとするセルフヘルプグループの性質をもつオンラインコミュニティの効果」『日本社会心理学会第 49 回発表論文集』.
5. 砂谷有里, 2009, 「自傷サイトにおける自傷の伝染—自傷発生と傷の重篤さの競い合い」『日本社会心理学会第 50 回大会・日本グループ・ダイナミクス学会第 56 回大会合同大会発表論文集』.
6. 山口亜希子, 松本俊彦, 近藤智津恵, 2004, 「大学生における自傷行為の経験率—自記式質問票による調査—」『精神医学』 46: 473-479.